

はじめに

昭和の末、五十七、八年の頃だったか、当時在職していた東京町田の桜美林大学中文科で、学生が、漢詩の作詩を学びたい、と申し出てきた。

そこで早速、課外に私の部屋に集めて、手ほどきから始めた。それを何回したのかもう思い出せないが、やがて、どこからどう聞き伝えたか、他大学の院生などが来るようになり、毎月一度、土曜日の午後、私の部屋をサロンにして、早大、慶大、立教大、お茶の水女子大、日本女子大、二松学舎大、東京教育大等の院生、OB、又漢詩愛好の年輩の女性も集まって、作詩の会が続けられた。

最古参の一人、水出和明君みずいでの記録によると、昭和五十九年に湯島聖堂に集まり、「櫻林詩會おうりんしかい」として正式に発足した、という。その頃、私は聖堂を管理する財団法人斯文会しぶんかい（現在は公益財団法人）の常務理事を兼ねており（平成二年よりは理事長として今に至る）、また同所で漢詩鑑賞の講座を十五年來担当していたので、交通の便もよい聖堂に拠点を移したのである。平成二年からは、私の所属も桜美林大学より九段の二松学舎大学に変わった。

この会を始めるに当っては、特に方針や目標は立てず、自然に任せ、来たる者は拒まず、去る者は追わず、この間、東大、国土館大、埼玉大、東京学芸大の学生、出身者も新たに参加してきた。初めから数えれば、延べ何人が名を連ねたか。

メンバーは入れ代りつつ、常時十人前後が月一回土曜の午後、聖堂に集まる。四月には花見、十二月には忘年の宴を催し、和気藹々、近ごろは中国から留学の若い人も参加してくる。そして、三十年。今では、幹事の後藤君ら師範級の上級者及びこれに準ずる者が幾人も出てきた。一昨年ごろより、この節目を迎え、また私の傘寿を祝って、記念の詩集を出したい、併せて後進の為の手引きともしたい、という声があがり、水出、後藤、中嶋の諸君を中心に作業が進められた。まず、各自が任意に提出したものを、そのまま並べる形にしてみたが、それでは「手引き」にならないし、多くの人に読んでもらうわけにもいかない。いろいろ考えた末、私の本を多く出版してくれている大修館書店の黒崎さんに話を持ちかけ、結局「詩集」ではなく、詩を素材として「読み物」を作ることとなった。そこで、ベテラン編集者の正木さんと新進の佐藤さんの登場となる。詩会の方からは、後藤淳一、中嶋愛の新旧の気鋭が対応。いろいろな意見を出し合い、このような形となった。詩の配列は、形は絶句から律詩へ、内容は大まかに易から難へ、としてある。表題は、以前に出版した『石川忠久 漢詩の講義』（平成十四年四月刊）に続く意味をこめて

『石川忠久 漢詩の稽古』とした。「稽古」というのがピッタリで面白いものができたと思う。漢詩を作る人、これから作ろうとする人たちには是非読んでいただきたいと念じている。

思うに、戦後漢字を制限し、漢文をはじめ古典の教育を疎かにした結果、漢詩を作るという、古来の、殊に江戸以来の風雅な道が消滅に瀕してしまった。日本文化を形成する土台が薄くなった、と言うべきであろうか。「狂瀾きやうらんを既倒きとうに廻めぐらす」という言葉があるが、何とかこの退勢を回復したいのが、私の念願である。

何気なく始めたこの会だが、弟子たちが言わず語らずのうちに私の志を汲み、こうして今日まで会を続け、さらには馬齢を祝ってくれること、まことに嬉しい限りである。余生の幾何なるかは知らず、この会の長く続くことをひたすら願っている。

あらためて、大修館書店の黒崎昌行さん、正木千恵さん、佐藤悠さんほか、お世話になった方々に深甚の謝意を表する次第である。

二〇一五年五月立夏の日 東京九段の哲中庵にて

石川 忠久